●本号の内容

『賃金破壊』の書評や紹介記事が各紙に続々登場している。「関西生コン事件」という重大な事件がおきていることをより多くの人々が知るきっかけとなるだろう。

斎藤貴男さんの書評（下左）は１月８日東京新聞。下右の佐高信さんの紹介記事は本日発売の日刊ゲンダイ。

また、デモクラシータイムスは、池田香代子さん（翻訳家。『世界がもし 100 人の村だったら』など著作多数）と竹信三恵子さんの対談を YouTube で公開。視聴回数は本日現在で 1 万 3 千回となっている。（「デモクラシータイムス　組合つぶしと低賃金の日本」で検索）

賃金破壊　労働運動を「犯罪」にする国

竹信 三恵子 著

（旬報社・1650円）

国策としての労組潰しの深層

グローバル化が加速した一九九七年以降の四半世紀を通して、賃金が下がり続けている先進国は日本だけだ。米英仏独伊のいずれもで、20～30%は上がっているのに。

〝異次元〟も窮まった賃金デフレ。見せかけだけの〝アベノミクス〟の主が表舞台を去り、ようやく知れ渡った日本経済の実態を読み解くカギのひとつが、本書にはある。

練達の労働ジャーナリストが、「関西生コン事件」の深層を活写した。生コンクリート輸送の運転手らを組織した「全日本建設運輸連帯労働組合」の関西支部を標的とする、国策としての労組潰しだった。

二〇一八年夏から一年間で延べ八十九人が逮捕され、うち七十一人が起訴された。同じ人物の逮捕や勾留を、いくつもの警察署が重ねていく。凶悪犯並みに住所まで晒す報道。検察の求刑は殺人罪を連想させるほど重かった。

関生支部のような産業別組合には、企業別組合とは異なる戦術がある。国際的にはそれが普通だし、ほとんどが企業別組合の日本でも、もちろん法的に認められた活動だ。

それでも弾圧された理由。本書によれば、当局は彼らの正当な組合活動を「カネ目当て」の「嫌がらせ」「脅し」「不当な圧力」などと言い換えることで、暴力団などの組織犯罪と同然に扱ったという。

いかなる無理無体も、言葉の表記や定義を変えてしまえば〝問題ない〟。縮小するパイの分配先から労働者を外すためなら、人間の生存に関わる労働基本権だろうと容赦なく、だ。集団的自衛権の行使を容認する新法に「平和安全法制」の名を与えた安倍晋三政権らしい、憲法二八条の「解釈改憲」と言うべきか。

事件におけるメディアの問題にも一章が割かれている。朝日新聞出身の著者による構造的陥穽の指摘は生々しい。記者の取材よりSNS上の空気を優先するデスクが現実にいるらしいとは呆れた。

このままなら、賃金デフレは一層の深みに嵌り、日本の何もかもがジリ貧になっていく。だが著者は希望を捨てない。ラストの一行に感じ入る。

評　斎藤 貴男（ジャーナリスト）

ジャーナリスト・和光大名誉教授。著書「しあわせに働ける社会へ」など。

もう1冊　葛西敬之著『国鉄改革の真実　「宮廷革命」と「啓蒙運動」』（中央公論新社）。労組を潰したい側の論理とノウハウ。

ビジネスマン必読 週刊オススメ本ミシュラン

選者 佐高信

中国文学者で魯迅の訳者でもある竹内好の故郷、長野県佐久市で竹内についての講演をして以来、竹内の本を読み返している。

1963年3月31日の日記に竹内はこう書いていて、改めてこの本のことを思った。

「きょうは私鉄の24時間スト

まず連合会長が知るべき「労働組合とは何か」

賃金破壊

竹信　三恵子著／旬報社

新聞はますます末期症状になり、それを救う道はないという1年前の私の判断は狂わなかったように思う」

それからおよそ60年経って、新聞の末期症状も進んだが、目を覆うほど劣化したのは労働組合だろう。いま、24時間ストなど考えられない。ストどころか、組合そのものが反社会的存在視されているからである。

この本の副題が「労働運動を『犯罪』にする国」。私は連合がそれに手を貸していると言わざるを得ない。個人加盟による産業別労働組合として関西生コンは、中小零細生コンの経営者とも手を結び、賃の低下をいとわない大手ゼネコンの経営者に対抗して働く者の賃金を上げてきた。

それがゼネコンの経営者たちには怖かったのだろう。徹底的な組合つぶしをして、組合員を逮捕し、長期勾留の揚げ句に重刑を科している。この本でその具体例が描かれているが、驚くべきひどさである。

昨年の衆院議員選挙の後、自民党選挙対策委員長の遠藤利明は「決して楽な選挙ではなかった。相手方のいろいろな混乱があって、連合会長が共産党ダメよと、そんな話をしていたこともあって勝たせていただいた」と告白したという。

元自民党政調会長の亀井静香は「連合というのは、革新の仮面をかぶってるけど中身は自民党なんだよ。労使協調と言ってるだろう。経営者は自民党支持なんだから、結局自民党が勝つほうが今の労使協調体制を維持するのには都合がいいんだ。本当の労働者政党が政権を取ったら困ると思ってるんだよ」と喝破した。残念ながら、その通りなのだろう。連合会長の芳野友子は、まず、この本を読んで、労働組合とは何かを把握し、幼稚な反共意識を捨てるところから始めなければならない。

★★★

組合つぶしと低賃金の日本 竹信三恵子さん 池田香代子の世界を変える100人の働き人60人目 2022.1.11.